

発行人 ● 杉浦賢次 / 編集人 ● 蒔田純司

東京都港区芝浦3-2-22田町交通ビル2F / TEL(5444)0510 / FAX(5444)0303 / <http://www.rengo-tokyo.gr.jp/>

2つの競技で パラ出場をめざすレジェンド

車いすフェンシング

やす なお き

安直樹さん 私鉄総連／東京メトロ

パラスポーツ界のレジェンドの一人。車いすバスケットボールの得点王に永く君臨し、日本代表としてアテネパラリンピック（2004年）に出場後は、イタリア・セリエAなどの海外のトップリーグでも活躍した安直樹選手。車いすバスケットボール引退後の2015年からは「車いすフェンシング」に転向し、ここでも日本代表として東京2020大会で2競技目のパラリンピック出場をめざすマルチなスーパー・パラ・アスリートです。

（インタビュー担当：連合東京副事務局長 蒔田純司）

絶望の毎日から救ってくれた 車いすバスケットボール

——バスケットボールに続きフェンシングの日本代表として、マルチな才能を発揮されている安さんが、パラスポーツと出会ったのは、どんなきっかけがあったのですか？

安 ● 子どもの頃からスポーツが本当に大好きで、人前でカッコいいところを見せようと張り切る活発なタイプでした。ところが14歳の時に左足股関節骨に病を患ったために受けた治療で手術ミスがあり、その後は重い障がいをもつ身体になってしまったんです。

それはもう大変なショックで、しばらくは絶望の日が続き、学校に通うことすら嫌な毎日を送るようになりました。障がいという大きなコンプレックスを抱えつつ、子どもながらに少しずつ前向きに「運命を受け入れよう」と思い始めた頃、中3の夏だったと思いますが、知人の勧めで地元の車いすバスケットボール（以下、車いすバスケ）の試合を観戦に行ったんです。

それがハマったんですね。高校に入学してすぐに、茨城県で唯一の車いすバスケのチームだった「ロータス茨城」というクラブに入りました。幅広い年齢層の選手たちに加わって、



安直樹さん

PROFILE

私鉄総連（東京メトロ勤務）

1977年10月、茨城県ひたちなか市生まれ。

14歳の時に左足股関節骨の病の治療で手術ミスを受け、重い後遺症をもつ障害者に。高校入学後に始めた車いすバスケットボールで頭角を現し、千葉ホークス所属時に日本選手権で優勝4度、得点王を2度獲得。2004年、アテネパラリンピック日本代表。2007年、オーストラリアナショナルリーグに移籍・活躍が認められ、イタリア・セリエAのPDM TREVISIOに入団し日本人初の海外プロプレーヤーに。3クラブで活躍後帰国。バスケットボール引退後の2015年、車いすフェンシングに転向し直ちに日本代表選手。最高成績は2018年8月のW杯カナダ大会の3位（サーブル）。2020東京パラリンピックの出場と上位進出をめざしている。

主な戦績

車いすバスケットボール

- パラリンピック 2004年 アテネ出場
- 日本選手権 優勝（2003、2005～07）、
得点王（2002、2004）、MVP（2003）
- セリエA 個人得点ランク3位（2008）

車いすフェンシング

- 全日本選手権（国際親善大会） ベスト4（2018）
- ワールドカップ・カナダ大会 3位（2018）
- ワールドカップ・京都大会 決勝T進出（2018）

しかし最初は車いすに乗りながらのボールの扱いに慣れるのが難しくて、チームの戦力になるにはけっこう時間が掛かりました。徐々に主力として試合でも結果を残せるようになってからは、とても楽しい毎日を送ることができました。

——やがてチームを移られたんですね。

安●地元のチームで4年間プレーして活躍していた頃、それまでは全国規模の大会には特に興味をもっていなかったのですが、東京体育館で行われた日本選手権の大会を観に行ったら大きな衝撃を受けたんです。

「凄い、レベルが違う!」。それに観客の数と声援の大きさに驚きました。車いすバスケットでこんなに注目される場所があるんだ。自分もこんな舞台で思い切りプレーしてみたいと。

そのとき最強と言われていたのが隣県にある「千葉ホークス」でした。迷わず移籍する道を選択しました。

勝ち方をよく知っているハイレベルなチームでしたから、所属後には地元で天狗になっていた自分の未熟さを知ることになりました。パワーもスピードもついていけない。これはマズいと、必死にトレーニングしましたね。夜にはクルマのライトで道を照らしながら、自宅近くの坂道で車いすダッシュの練習を繰り返しました。試合に出たいという一心でした。

——日々の努力が実って、安さんはその後日本を代表する車いすバスケットプレーヤーになられます。

安●日本選手権では3連覇を含めて優勝は4回、得点王にも2回になりました。国内では相応する敵がないという状況でしたね。ですからチームに在籍しながら、アメリカのチームに留学して武者修行もしました。

「もっと強くなりたい」。そう思うようになったきっかけは、日本代表として出場した2004年のアテネパラリンピックでした。欧米の選手たちの桁違いのパワーとスピードに圧倒されました。

国内でチャレンジ感が徐々に失せてきたことを自覚して、2007年にオーストラリアのナショナルリーグの強豪チームに移籍しました。その年のプレーオフで1試合に30得点したことが認められて、世界最高峰と言われたイタリア・セリエA



とても熱心にインタビューに応じて下さいました



東京2020大会への抱負を熱く語る安選手

のプロチームにピックアップされたんです。

——日本人初の車いすバスケットのプロ選手が誕生したんですね。イタリアではいかがでしたか？

安●普段のチーム練習から激しい競争の毎日でした。各国から外国人選手が集まってきていて、レギュラー争いは熾烈そのもの。ポジションを獲るためには手段を選ばないという強者揃いの中で、それは鍛えられましたね。なによりも精神面が。

3シーズンを過ごすなかで、2年目には個人得点ランキングで3位になることができました。やれることはやったといえる日々でしたが、とにかくタフな生活が続いたというのが一番の印象です。

第2の競技人生は多くの競技からフェンシングを選択

——帰国後も国内の第一人者として車いすバスケットを続けられますが、やがて大きな転機が訪れますね。

安●日本代表を引退してから車いすバスケットの世界を離れようと決意したのが36歳の時でした。しかし2020年には東京でパラリンピックが行われる。人生でまたとない絶好の機会に、「できれば自分も選手として再び出場したい」という思いは車いすバスケットを離れてから一層強くなりました。

それで色々な競技にチャレンジしてみたいんです。自転車、競泳、テニス、ボートやセーリング、バドミントン、フェンシング、シットイングバレーなど。それぞれの競技団体に申し込んで、ひと通り体験させてもらいました。その中で、どの競技が自



分に向いているかということではなくて、どの競技なら自分がパラリンピックに出場できるだろうかということを基準に専念する競技を見つけようと思ったんですね。

その答えが車いすフェンシングだったわけです。やる前まではフェンシングを観たこともなく、ルールすら知りませんでしたが、経験してみるとすごく楽しかった。車いすバスケはなによりフィジカルが重視されますが、フェンシングは筋肉の動かし方や骨格を意識して常に姿勢を正すこと、保つことが必要であり、車いすバスケとは異なる相当なポテンシャルが必要とされることを知りました。

「ゼロポジションを保つ」というのがフェンシングになにより大切なセオリーなんです。30代後半の自分にとっては、過去に鍛えてきたフィジカル以上に、海外経験を通じて培った精神面を活かすことができるかもしれないと期待したんですね。38歳の時でした。

——転向を決断されて、周囲の人たちの反応はいかがでしたか。

安●ほぼ全員から猛反対されました。車いすの動きを操る技術のことをチェアワークというのですが、フェンシングでは固定した車いすに座って闘います。

「チェアワークがお前の武器だったのに、なんでそれを活かさないフェンシングなの？」と散々言われましたね。

反対を押し切ってチャレンジしたフェンシングでしたが、2015年の夏に最初に出場した国際大会では1-5で惨敗しました。やはり激しく動くことより冷静さが求められる競技だけに、非常に難しさがあります。力まずにスピード豊かにプ

レーする。これは簡単なことではありませんから、しばらく苦労が続くのは覚悟のうえでした。

**2018年7月のワールドカップで
過去最高の3位に**





休むことなく真剣勝負が続く

——しかし、その2か月後の世界選手権では日本代表選手として、いきなり国際試合の初勝利を果たされていますね。さすがパラスポーツのレジェンドといわれる対応力の早さです。安●最初の日本選手権で優勝できたのは大きな自信になりましたね。でも、まだまだです。国内の競技人口は50人にも満たない状況のなかで、常に国際レベルを意識しながら取り組まないと向上はみえてきません。

2018年7月にカナダで行われたワールドカップで3位になったのが過去最高の成績ですが、このときはヨーロッパの強豪選手の多くが出場していなかった大会でした。現在の實力は、正直なところ世界ランキングでいえば20位前後だと思います。強豪が勢揃いする国際大会では、ベスト32からベスト16を狙う位置にまだいる感じですね。2020年までに成長しなければならない余地が大きいですね。

種目も当初はフルーレで闘っていましたが、今はサーブルを主な種目として取り組んでいます。フルーレは剣で突くことだけで争う種目ですが、サーブルは切る動作もポイントとして認められます。自分の適性にはサーブルの方が合っているだろうと判断しました。他にエペという種目もあります。種目数は一般のフェンシングとまったく同じです。

——車いすフェンシングの国際情勢はどんな状況なのか？

安●中国が強いですね。あとロシア、イタリア、ウクライナといったところが競っている感じです。日本もクオリティは高いと思います。まあ、どこが強いというよりも、自分にとっては世界の全選手がライバルであり目標ですね。

世界のトップレベルの選手と対戦したら、いまの自分は4ー15くらいで負けるレベルかな。でも以前だったら、4点のほとんどが相手のミスから得ていた感じでしたが、最近は自分で狙って得点するケースが増えてきたと思っています。この割合を少しでも高めていきたい。この先の1年半余りはその積み重ねになりますが、時間はそんなにないのも現実です。しかし焦らず、確実に強化できればと思っています。

パラスポーツに恩返しするために チャレンジを続けるレジェンド

——お勤めの東京メトロでは、会社を挙げて安さんをバックアップされているとお聞きしています。

安●はい、非常に温かい支援をいただいています。会社では広報の仕事をさせていただいていますが、各種のイベントや学校などを訪問して、東京メトロの紹介とパラリンピックのPRにも努めています。私の出場する試合に社長自ら観戦に来ていただいたこともあります。組合の方々からの声援にも本当に感謝しています。

そうしたありがたい環境のなかで、私が競技を続ける上で、最も大きなモチベーションとなっているのは何だろうと考えることがあります。

それは、大きく分けて2つ。

一つはパラスポーツへの社会の人々の関心をより高めることです。そのためには「お金を出しても観てみたい」としてもらえるような試合・ゲームを私たちが見せていかないとはいけません。ぜひそういったレベルまで高まった状態で東京2020大会を迎えられたら、うれしい限りですね。

もう一つは、41歳になった私が今も勝負の世界で闘っている。その姿を障がいをもちながらチャレンジしたいという人たちに向けているつもりです。とくに若い人たちですね。絶望しかけた14歳当時の私を深い淵から救ってくれたのが、パラスポーツでした。

今の私は、そのパラスポーツに恩返しするために闘っているのかもしれない。



東京メトロの職場の皆さんに囲まれて